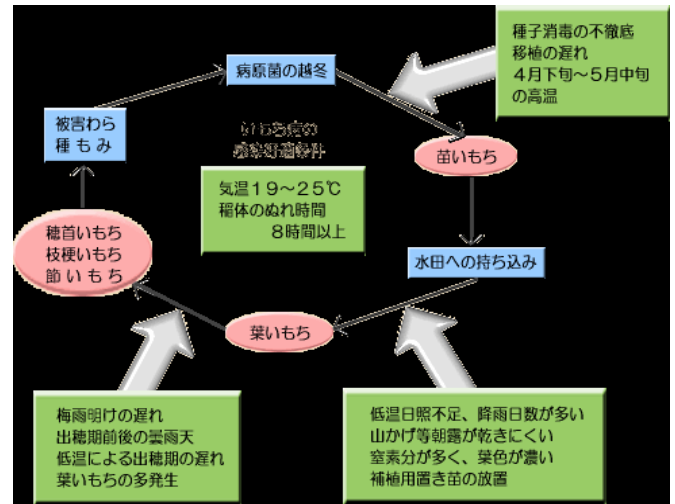


## § 1 いもち病と発生予測 BLASTAM について

＜いもち病とは？＞

イネに発生する主要な病気の一つで、原因はカビの一種（子のう菌類）胞子が増え、空気広がる空気伝染病です。イネの保菌種籾が発生源となり、圃場に持ち込まれる場合が多く、伝染サイクル（右図参照）は、保菌籾⇒苗いもち⇒本田へのもちこみ⇒葉いもち⇒穂いもち⇒保菌籾となります。本田での病気の発生は、連続した雨や曇天等で、イネの葉面の「濡れ」がなかなか消えないと、胞子が発芽してイネの中に侵入して感染し、7日～10日後に発病に至ります。



葉いもち病

穂いもち病

本田でのずり込み症状



＜いもち病発生予測システム 「BLASTAM(ブラスタム)」とは？＞

アメダスデータ（気温、降水量、日照時間、風速）をもとに、いもち病の感染に好適な条件であるかどうかを推定するシステムです。各県の病虫害防除所が測定し、その予測を発表しています。このシステムでは、いもち病の胞子が発芽、感染するための必要条件を次のように設定しています。

- 1) 葉面湿潤時間が10時間以上
- 2) 葉面湿潤時間中の平均気温が15℃～25℃
- 3) 前5日間の平均気温が20℃～25℃

これらの3つの条件がすべて満たされると、いもち病が感染するのに好適な条件と判定されます。感染好適条件が連続して広域で出現した場合、7～10日後に広域的に葉いもちの病斑が確認され始め、さらに7～10日後には発病の増加が始まると推定されます。圃場を巡回し葉いもちの発生に注意が必要です。

＜注意＞BLASTAMは広域にいもち病が感染する時期を推定するシステムであり、特定地点の発生を予測するものではありません。最寄りのアメダス地点だけでなく、周辺地点の状況も併せて判断することが重要です。また、圃場条件（風通し、日当たり）や、栽培条件（窒素過多、取置苗の発病等）に、防除体系は考慮されていないので、適宜圃場を見回り、発生に注意することが必要です。

<主ないもち病の防除薬剤>

系統	原体名（商品名）
抵抗性誘導剤*	プロベナゾール（オリゼメート剤、ビルダー剤） リアジニル（ブイゲット剤） イソチアニル（ルーチン剤、スタウト剤）
ストロビルリン系（QoI 剤）**	オリサストロビン（嵐剤）、 アゾキシストロビン（アミスター剤）
メラニン生合成阻害 R 系統剤	トリシクラゾール（ビーム剤） ピロキロン（コラトップ剤） フラサイド（ラブサイド剤）
メラニン生合成阻害 D 系統剤**	カルプロパミド（ウイン剤） ジクロシメット（デラウス剤） フェノキサニル（アチーブ剤）
有機リン系	イソプロチオラン（フジワン剤）
ピリミジン系	フェリムゾン（ブラシンの 1 成分）
+呼吸阻害複合体 III（作用点）	テブフロキン（トライ剤）

+：系統は未定。

\*：根から吸収され、イネ自体の自然免疫力を高めることで効果を示します。

\*\*：耐性菌発生が確認されている薬剤（ストロビルリン系（QoI 剤）、メラニン合成阻害 D 系統剤）は育苗箱では使用せず、本田防除も 1 作 1 回までが望ましい。

⇒ 農薬を使用する際には、ラベル記載事項を遵守してください。

<いもち病防除対策 10 か条>

- 1) いもち病が発生していない田んぼから採取された健全な種籾を使用する。
- 2) 塩水選と種子消毒の徹底。
- 3) 育苗箱施用では、適切な量の処理をする。
- 4) 捕植用の残り苗は、捕植が終わったら速やかに処分する。
- 5) 窒素肥料のやりすぎに注意し、適正量の施肥を心がける。
- 6) プラストム情報を参考に、いもち病の早期発見、早期防除に努める。
- 7) 葉いもちの病斑が少なくても、進展型病斑がみられたら速やかに防除する。
- 8) 葉いもちが認められた圃場では、穂ばらみ期に穂いもち防除を行う。多発時には穂ぞろい期にも防除する。
- 9) 薬剤耐性菌の発生を防ぐため、異なる系統の薬剤で体系的に防除する。
- 10) 「低温、日照不足、長雨の年」や「いもち病にかかりやすい品種の栽培」には、いもち病の防除対策を徹底する。

⇒ いずれにしても「いもち病」は早期発見、早期防除が基本です。また、農薬も予防剤としての使用が基本で、治療剤でも決して病斑をなくすわけではなく、それ以上、病気が蔓延しないことを意味しますので、間違えないようにお願いします。